



発行日 = 2006年10月25日 発行人 = 面出 薫 編集 = 田沼 彩子・矢野 大輔・小川 祐樹  
照明探偵団・事務局 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-28-10 ライティングプランナーズ アソシエーツ内 (田沼 彩子)  
TEL : 03-5469-1022 FAX : 03-5469-1023 e-mail : office@shomei-tanteidan.org http://www.shomei-tanteidan.org

# 照明探偵団通信

vol.26 Shomei Tanteidan Tsu-shin

## 国内調査レポート

広島

彩るための光 / 祈るための灯 (8/5-7)

## 海外調査レポート

台湾 / 台北

過去と現代の交錯 (8/15-18)

## 照明探偵団倶楽部活動 1

第 29 回街歩き

箱根登山鉄道『夜のおじさい号』編

おじさいが彩る幻想的な夜 (6/28)

## 照明探偵団倶楽部活動 2

第 32 回研究会サロン (7/7)

## 照明探偵団倶楽部活動 3

キャンドルナイト @Omotesando-

Eco Avenue 2006 夏至 (6/21)



世界一を誇る高層ビル 台北 101

# 広島 彩るための光／祈るための灯

2006.8.5-7

永津 努+小川 祐樹

8月6日、平和記念式典。広島市の街に原爆がおとされてから今年で61年。式典には毎年約5万人の人々が訪れる。その夜、原爆ドーム脇を流れる元安川では、人々の手によって数千個もの灯籠が流される。平和への祈りや追悼の想い、様々な想いを乗せた灯籠たちが、広島をどのように彩るのか。灯籠流しをはじめ、厳島神社、広島市街地の光の調査を行った。



■厳島神社

ブルーモーメントに浮かび上がる厳島神社本殿

日本でも有数の観光地に挙げられる世界文化遺産厳島神社。夜にはその本殿と大鳥居がライトアップされると聞き、我々はその光を調査するべく宮島へ降り立った。焼けるような夏の日差しの中、時おり鹿に邪魔をされながら、撮影ポイントの探索と照明器具の調査、主要箇所のスケッチに島内を歩き回った。事前の調査でこの時期はブルーモーメントと満潮の時間がぴったりと重なることがわかっていたので、そこに広がるであろう美しい光景への期待を胸に、夕暮れを待った。やがて日が傾き、空が深い青に包まれ始めると、ライトアップのための照明が点灯し、厳島神社は夜の表情へと変化した。本殿は海の両岸に5台ずつ設置された1kw ハロゲン投光器の光によって照らされ、闇の中にぼんやりとその姿を現していた。しかしその印象は、明暗のメリハリがなくのっぺりとしていて、迫力はあったものの、美しさという観点からは本殿が持つポテンシャルをうまく生かしきれていないように感じた。



本殿への照明：1kwのハロゲン投光器が5灯



大鳥居：水銀灯2灯とナトリウム灯4灯の混光照明、50mほどの距離から照らされている



参道からはのっぺりした印象（輝度は約4cd/m<sup>2</sup>）



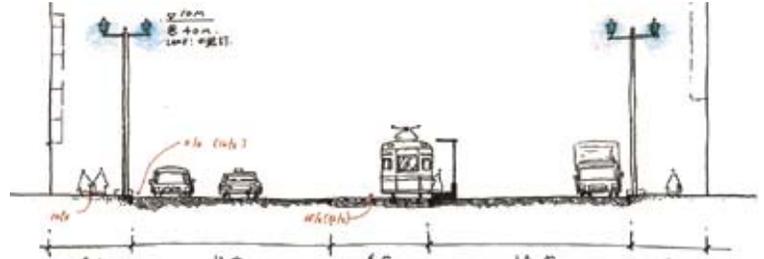
等間隔に並ぶ石灯籠、奥に見えるのは本殿と五重塔

大鳥居は水銀灯とナトリウムランプの混光照明によって片岸から照らされていて、参道となっている照明側の岸から見ると、本殿と同様にのっぺりした印象になっていた。しかし対岸から見ると鳥居にくっきりと明暗の差が現れ、重厚な印象とともに海上にそびえ立って見えた。ただ演色性がよくないために、朱の印象がやや物足りなく感じた。参道に並ぶ石灯籠には22wのミニクリプトランプが用いられていた。その小さな明かりが闇に浮かぶ本殿へと連続する光景に、夢幻的な美しさを覚えた。

しかし約4m間隔で連続する石灯籠の合間に30m～50mの間隔で機能照明として水銀灯のボール灯が立っていて、その色の悪い光が視界に入ると、美しいと感じていた光景は崩れてしまった。調査の結果、厳島神社を彩るための光は全体的に大雑把なライティングによってまかなわれているという印象を受けた。もっと演色性と影を意識したデザインをすればよりよい光の景観が見えてくるだろう。世界文化遺産として日本を代表する神社であるからには、より慎重で繊細な光をまとってほしいと思う。

## ■広島市街調査

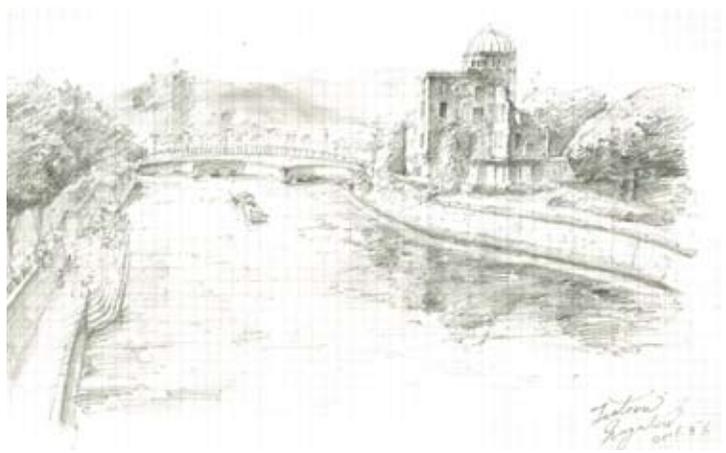
路面電車が市内の主要な交通機関の一つとなっている広島市。大通りの中央には線路や駅が配され、特徴のある街並みを形作っている。街のところどころにはデザインされた面白いポール灯も見受けられた。街全体の明かりを見ると水銀灯が多く、演色性の悪さも影響してかその整然とした街並みからは少し寂しい印象を受けた。



広島市街・紙屋町大通断面



紙屋町周辺：路面電車が街を走る



元安川のスケッチ

丹下健三氏の計画による平和記念公園の周りにはイサムノグチ氏設計の橋や海外のデザイナーによるモニュメントなどがいくつも建てられ、一帯には平和をモチーフにしたデザインが浸透していた。すぐ近くには原爆ドームがあり、夜にはそのライトアップを見ることが出来た。外壁を水銀灯、内側をナトリウムランプで照らされていたので、光の色によるコントラストがくっきりと現れていた。橙色の光を内包した青白い躯体が闇の中に薄暗く浮かび上がる様は、美しさよりもむしろ畏怖の念を感じさせるものであり、またその薄暗さによってその存在の重みを表現しているようにも見えた。



世界文化遺産 原爆ドーム：光色によるコントラストが印象的



灯籠の灯には流す人の祈りや想いが込められている



川を流れる灯籠たち：暗くなるにつれモノから光へと移り変わる



流灯する永津団員

## ■ 灯籠流し

8月6日、平和記念式典が行われた夜、原爆ドームの脇を流れる元安川には毎年、数千個もの灯籠が流される。歴史的悲劇から生まれた光の文化は今、どのように広島という都市に根付き、またその夜をどのように彩るのか。我々はその光の文化に触れるため、灯籠流しに参加した。

午後6時、まだ空には明るさの残る中、最初の灯籠が流された。木の骨組みを組み立て、メッセージを書いた紙で囲む。高さ30cmほどの灯籠は参加者自らの手で組み立てられ、川へと流される。中に灯された一本の蠟燭の灯は薄暮の空の明るさにかき消され、まだ見えてはこない。やがてあたりが暗くなり始めると、灯籠と空の明るさが段々と近づき、あるとき逆転する。その瞬間から徐々に、灯籠はモノから光へと変わり、周囲に対してそ

の存在感を強める。色とりどりの柔らかな光を放つ箱となった数百の灯籠たちが目前を流れる光景の美しさに感動し、何度もシャッターを切った。細く連なった無数の灯籠の灯によって新たな光の川が生まれようとしていた。

日が完全におち、空の色に変化がなくなった頃、一通り写真を撮り終えた我々はようやく一息つくことが出来た。カメラを置き、改めて灯籠を流す人々や流されていく灯籠を眺める。しばらく流灯会場を歩き回っていると、一人の老人に目が留まった。その老人はにぎやかな会場の中で、流れていく一つの灯籠に向かい、ずっと静かに手を合わせていた。その灯籠を見てふと灯籠流しの本来の意味を思い出し、もう一度あたりを見回した。改めて見ると会場にはその老人と同様に

神妙な面持ちで灯籠を眺める人や手を合わせる人が何人も見受けられた。平和への祈りと追悼の想い、実際に目にするまでは灯籠流しの表現として使ってきた言葉の意味を、このとき初めて実感した思いがした。ついさっきまで、ただ美しいと感じていた光景が急に悲しいものに見えた。川の向こうには原爆ドームが印象的に浮かび上がっていた。

(小川祐樹)



原爆ドームを背景に光の川が流れる

# 台湾／台北 過去と現代の交錯

2006.08.15-18

田中謙太郎＋山本幹根

台北は東に向かって街が発展している。東の方には現代的な建築が立ち並び、TAIPEI101という高さ508mで地上101階の世界一高いビルもある。しかし、一歩路地に入ると生活感の漂う古いビルが軒を連ねており、独特の雰囲気があった。そこには、活気ある人々が行き交い、どことなく懐かしさを感じさせる街でもあった。

## ■ TAIPEI101 へ

TAIPEI101は台北の東部に位置している。現在世界一の超高層ビルであり、地上101階、地下5階、高さ508mの複合オフィス建築となっている。シンボリックなデザインで、台北のランドマークとなっている。周辺は新都市として開発され、現代建築が建ち並ぶ。

展望台からは台北市内を一望できる。夜になると、建築が徐々に闇に沈み、同時に車道が光により浮かび上がる。光は地上付近にたまり、上方に漏れる光は非常に少ない。このため視線が平行になるにつれて暗く見える。これは台北の特徴である、“騎楼”と呼ばれるアーケードがあるためであると考えられる。

光の要素としてビルディングトップをライトアップしている建築はほとんど無く、車道を照らす光と建築内部から漏れてくる光から構成されているため、ひっそりとした都市であった。



台北 101



台北 101 周辺



台北 101 から見る台北市内

## ■メインストリート

中山北路は台北を南北に貫くメインストリートである。中山駅から北は中山北路二段と呼ばれ、高級ホテルやブランド店が並び、商業エリアになっている。南は中山北路一段で、比較的古い建物が残っており、雑多な雰囲気であった。

中山北路は片側4車線になっており、歩道用ポール灯と2灯用の車道用ポールで構成されていた。

樹木が非常に大きいため、車道用ポール灯の光は樹木により遮られ、効果的に車道を照らしているものは無かった。また、中山北路二段の歩道用ポール灯には樹木をアップライトするための照明器具と、ポールにインジケータ的なカラーライティングが使用され、オペレーションされていた。それにより大きな樹木で圧迫された歩行空間を、心地のよい空間に演出していた。



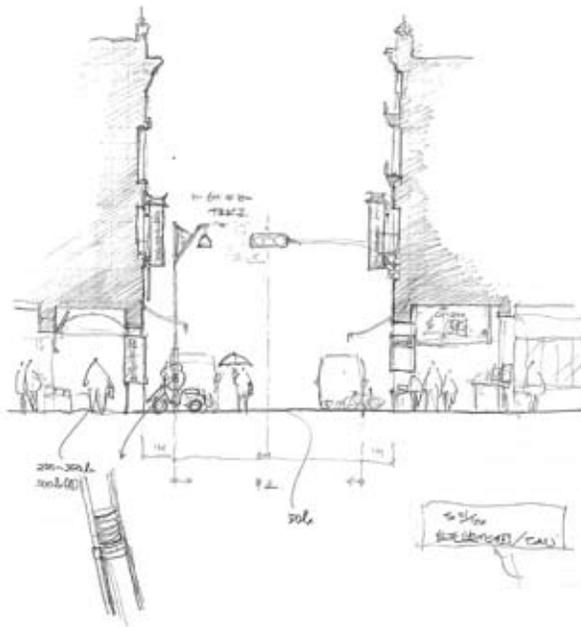
中山二段のポール灯



中山北路二段にあるルイ・ヴィトン

■迪化街

台北には日本の統治時代に立てられた建築が市内のいたるところに残っている。中でも迪化街には統治時代に建てられた建築が数多く残っており、問屋や商店が軒を連ねている。タイムスリップしたかのようなレトロな雰囲気に包まれた街であった。



迪化街にあるポール灯



迪化街の騎樓



建築の1階部分は騎樓と呼ばれるアーケードになっており、歩行空間として使用されている。昼間は暑い日差しを遮るため、薄暗い空間となっている。夜になると一転して光に包まれた空間になる。光は上方に漏れることなく効率的に店を照らし、車道空間は闇に包まれる。建築自体のライトアップが無いため、サイン照明が明暗のリズムを作り出し、落ち着いた光環境であった。

■士林へ

士林といえば夜市が有名である。夜市は日本で言うお祭りのようなもので、さまざまな屋台が並んで、非日常的な空間であった。

店や看板からの光は途切れることなく輝いており、通りに沿って建築を照らしていた。ひとつひとつの店はそれほど派手ではないが、光の色や明るさ、サインなどに統一感がないことでかえって賑やかさを感じる。雑多で混沌とした中を人々が行き交い、ここは活気に満ち溢れていた。



台北駅南部



士林夜市

■台北駅南部

台北駅南部は、台北の中心地である。台北駅沿いに大きな建築が建ち並ぶ。そこから一歩中に入ると、古くからある建物群が広がっている。

基本的に建築の一階部分は騎樓になっており、そこを歩行空間として歩くことになる。騎樓は車道からセットバックしている距離も違えば、天井の高さ、床のレベル、素材などが統一されていない。もちろん照明の手法、照度、色温度もさまざまであり、雑多な雰囲気であった。サイン照明も同様に、さまざまな大きさの看板、光の色、ネオンが点在しており、台北独特の空気感がそこにあった。それは急激に都市が成長したためであろうか。過去と現代が交錯し、新しい建築であっても古く見えてしまう不思議な感覚であった。

(山本幹根)